ベタエロ
美少女四人のベタでエッチな物語
立ち読み版
2DB
二次元ドリーム文庫
筆祭競介
挿絵 はたち

★登場人物紹介★

BETAERO CHARACTER FILE

第1話 Angelica

リーフ王国のお姫さま。
その美貌は大陸一とまで讃えられている。

アンジェリカ

Suzuhara Himari 第2話

学校で男女問わず人気の美少女。
「いまさらー」という口癖がある。

鈴原ひまり

第3話 Ayase Sizuru

希崎家に勤めるメイドさん。
おっとりとした性格だが、仕事はできる。

綾瀬静流

Arisugawa Rikka 第4話

日本を代表する名家のお嬢さま。
ちょっと高飛車な性格をしている。

有栖川律華

BETAERO EPISODE.1

第二話 お姫さまのベタでエッチな物語

ライル×アンジェリカ

第一話　お姫さまのベタでエッチな物語

月が夜空を照らす頃。
リーフ王国のとある屋敷で結婚披露宴が終わり――主役の新郎新婦がふたりっきりで寝室に移動していた。
俗に言う、初夜の始まりである。
寝室の入り口に立つ男はかなりの長身で、礼服姿でも逞しい筋肉の厚みが窺える偉丈夫。頬や額にいくつか剣による傷跡があるものの、いかにも誠実そうな顔立ちをしている青年だ。
「あ、あの……」
男はその立派な体躯に反して、やけに恐縮した声をドレス姿の小さな背中に向けた。
するとその声に合わせて、あまりにも端正な顔立ちをしていて透明感が凄まじい、絶世の美貌が振り返る。
澄んだ海のように綺麗な青い瞳に、降り積もったばかりの雪のように真っ白な頬。
形よく通った鼻筋の下には、桜の花びらを重ねたような唇がキュッと引き結ばれている。
そのプロポーションのよさも桁外れで――細い首筋に華奢な肩、豊かすぎる胸の膨らみ

に細いウエスト、女性らしい曲線をなめらかに描く長い脚。
光沢のあるシルクのドレスは鮮やかなライトブルーで、彼女の白い肌と、腰下まで流れる艶やかなブロンドを、より一層鮮やかに引き立てていた。
その姿はあまりにも美しすぎて、新郎に向けられた瞳に宿る凛とした輝きがなければ、高名な芸術家の手による彫刻作品だと錯覚してしまいそうになる。
「ライル様」
その絶世の美少女が、知性でよく抑制された、それでいて女性らしい柔らかさも感じさせる、とても涼やかな声を発した。
「は、はい」
逆に新郎の青年――ライルの方はその堂々とした体躯に反し、返事の声は明らかに緊張で上擦っている。
「な、何でしょうか……ア、アンジェリカ様」
そう名前を呼ばれた新婦は、形のよい左の眉をピクッと跳ね上げた。
（しまった！　何か、気に障ることを口にしてしまったようだ！）
もうそれだけで、ライルはパニックである。
相手が剣を手にしている敵ならば、常に平常心を保てるというのに――ドレスを着ている妙齢の女性には滅法弱い。

それというのも、ライルは田舎の騎士家に生まれ、母を早くに亡くし、幼い頃から武術の修練だけに明け暮れて育った。

そのため、若い女性相手に歳相応の経験を積む機会もなく、今日（こんにち）に至っている。

厳しい父親からは、お前はリーフ王家を守るために生まれてきたのだ、と物心ついた時から教え込まれた。

あまりに修業が厳しくて少しでも休もうとすると、鍛錬が足りず敵に敗れてもいいのか、と父に厳しく叱責された。

騎士のお前が弱くて死ぬのはかまわない。しかしもしお前の背に、リーフ王家の方がいる時は、お前の弱さが、そのまま王家の方々の死となるのだぞ。と。

ただ、そんな環境で育ったからこそ、ライルは身長で父親を抜く頃には国中でもその名が知れるほどの剣士となっていた。

そしてある事件を切っ掛けに、今ではリーフ王国最強の騎士とまで讃えられている――。

「……ッッッ」

それほどの豪傑が、小柄な美少女の眉の動きだけで、脂汗を流していた時である。

――スッ。

とアンジェリカが、いきなりその場に両膝をついた。

そして両手の指先を絨毯の上で揃えると、こちらに向かってゆっくりと頭を下げてくる。

「ライル様。不束者ではございますが、どうかよろしくお願いいたします」
彼女のその従順すぎる姿に、ライルはクラッと眩暈がした。
もうダメだ。
このままではとても平静ではいられない。
「姫！　どうか顔をお上げください！」
そう。ライルの新妻は、リーフ王家のプリンセスだった。
しかも現国王の正王妃が産んだ、正真正銘の内親王である。
「や、やはり無理です！　私はとても……姫を娶ることはできません！」
ライルは自分に対して深く頭を下げているアンジェリカに対し、絨毯に己の額を擦りつけるようにして絶叫する。
王家のためにその命を捧げよ、と幼い頃からそれだけを教え込まされてきたライルにとって――三歳年下の彼女を己の妻にすることは、精神的な障壁があまりに高すぎた。

※

事の始まりは、ライルがそのズバ抜けた剣の腕を買われ、アンジェリカの親衛隊に抜擢されたことである。
姫の親衛隊員はいわば名誉職的な意味合いが強く、上級貴族家の子息がその任に当たっていた。なので騎士階級のライルが親衛隊員に任ぜられたのは、それだけでとても希少な

ことだった。
その親衛隊員の任命式の時である。
ライルは初めて、アンジェリカを間近で目にした。
片膝をついて頭を垂れている自分の前に彼女が現れ、顔を上げた瞬間、そのあまりの美しさに全身が震えた。
この方は天使か、女神か……と。
「シグルドの子、ライルよ。貴方を我が親衛隊員に任じます」
「はっ。この命に代えて、アンジェリカ様をお守りいたします」
彼女が差し出した剣先にくちづけをする頃には、完全に心を奪われていた。
一目惚れである。
しかもライルにとっては初恋だった。
生真面目な男はそれを不遜なことだと、自らを戒めていたが――彼女に心奪われてしまうこと自体はそれほど珍しいことではない。
アンジェリカの美しさはリーフ王国内に留まらず他国にまで知れ渡っていて、『大陸一の美貌』とまで讃えられていた。
実父の国王もそんな末娘を溺愛していてなかなか手放そうとせず、結婚適齢期にさしかかっても縁談をまとめようとはしなかった。

そんな時、事件が起こる。
アンジェリカが定期的に行っている、地方の貧村への慰問に向かっている時だ。
姫の一行が、山麓の細い林道で二十人ばかりの賊に襲われた。
それも金品を目的にした山賊の類いではなく、明らかに訓練された者たちである。
狙いは当然、アンジェリカ姫の身柄。
自国内で敵に遭遇することなど想定していない親衛隊は、ほぼ同数の手練（てだ）れの敵の出現にアッという間に統制を乱した。
命を惜しみ、姫を置いてその場から逃げ出す者が続出する。式典などで見栄えよくするためには打ってつけの高貴な血筋も、実力が全ての実戦では全く役に立たなかった。
そんな中、ライルひとりが獅子奮迅の戦いをする。
逃げずに留まってくれた親衛隊員たちには姫の馬車の警護を頼み、ライルはひとりで襲い来る賊の集団に向かっていった。

※

「……顔を上げてください」
ライルが絨毯に額を擦りつけていると、アンジェリカの声が頭上から聞こえてきた。
王家に絶対の忠誠を誓っている男は、それを反射的に命令と認識してしまい、すぐに顔を上げてしまう。

彼女の望みを叶えたというよりは、自分自身がもうこうしたくってたまらなかった。
「あーーーー！　しょれ、らめらのぉ！　おちんぽグチュグチュ、きぼちよしゅぎて、何もかんがえられないろぉ！」
もう今のアンジェリカには、あの気品に満ちすぎていて、寒さすら感じさせるクールさの面影は微塵もない。
ライルとのセックスがもたらす熱情に、お淑やかなお姫様は蒸発し、彼女の本能が剥き出しになっている。
（ああ！　もう限界だ！）
蜜壺内を様々な角度から執拗にこねくり回していた腰の動きが、
――ガシガシガシガシッずぱぱぱぱぱン！
一直線で小刻みな突き上げへと切り替わる。それでもなお男根が彼女の中を一往復するたびに、大きく張り出した肉カリが膣襞を内側から掻き出すように擦り上げ、眉間にまで突き抜けるような肉悦を迸らせる。
「ああっ！　しゅごいのおぉぉ！　ああ！　まらイッれしまいますうぅぅ！」
その苛烈な突入に、彼女が大きく絶叫し、膝立ちの体勢になっている女体を再びビクビクと鋭く震わせた。
明らかにまた絶頂している。

アンジェリカはこれがセックス初体験にもかかわらず、完全にイキ癖がついてしまったようだ。

しかしライルの限界直前の突入は、彼女が達していようとも全く止まる気配がない。

片手は乳房を掴んだままだが、もう片手では肩を掴み、女体が上へ逃げないように抱きしめて――己の突き入れる衝撃を彼女の全てに叩き込む。

絶頂中の女体との交わりは、肉体だけではなく魂まで震えるような快感だった。

「ライルしゃまがッ、くいこんれくるのおおぉぉ！　わらしのいちばんふかくて、きぼちいいところにぃ！　もうらめれすぅぅ！　ちゅぢゅけれぇイッれしまいますうぅぅ！」

「今度は俺もイく！」

「いっしょにいぃ！　ライルしゃまもイッしょにイッてええぇえええぇ！」

「あぁぁぁ！　アンジェリカァァァァァァァ！」

ライルは最後に、華奢な彼女の骨格を砕きかねない激しさで、一際深く腰を突き入れ動きを止めた。

元田舎騎士の男根が、絶対の忠誠を誓っていた姫の最深部にグプンと深く突き刺さり、

――どりゅん！　どぎゅどぷッ！　どぎゅドプドプドプン！

マグマのように熱い生命の原液が、高貴な子宮内に思いっきりぶちまけられる。

「んはあぁあぁぁぁ！　ライルしゃまのあちゅいのがあぁぁ！　わらしのなかれぇ、ばく

はちゅしれいますううぅ！　ライルしゃまがぁッッ――あーーーーーーーっ！」
――ぶしゃあぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁぁ！
イっている最中に壮絶な膣内射精を決められて、先ほどからイキまくり続けているアンジェリカも最高のエクスタシーに達し、盛大に潮を吹き出した。
ライルはかまわず華奢な女体をきつく抱きしめて、この世で最も愛している女の子宮にドクンドクンと己の子種を注ぎ続ける。
「ああッ……アンジェリカッ……っあっ、くはあぁ……」
そうして最後の脈動の際まで愛する女の名前を繰り返し、ライルは長い射精を終えた。
無意識に閉じていた瞼を開き、両腕でしっかりと抱きしめている妻を見下ろす。
「はっ……っくはっ……はっ……はくぁ……」
アンジェリカは、いまだ絶頂の彼方に意識を吹き飛ばしたままのようだ。
うっとりと目を閉じているその美貌は鮮やかなピンク色に染め上がり、自分の太い腕の中で華奢な身体をビクッビクッと小刻みに震わせ続けている。
ライルはある程度、そんなアンジェリカの息が整ってからふたりの結合を解き、彼女をベッドに横たえさせた。
そして上から覆い被さるようにしてキスをする。
「んっ♥」

「奥だな！　たっぷりと突いてやる！」
誠が思いっきり腰を突き入れ根本まで男根を打ち込むと、肉先が彼女の最深部——子宮の入り口に当たった。
そのまま自らの腰を小刻みに揺するようにして、肉先でそこを小突きまくる。
蜜液まみれの膣襞たちとキツく密着したままカリ肉が擦れ、全身の細胞が肉悦に震えるほどの快感を貪る。
「あぁあぁあぁあぁあぁぁぁぁぁぁぁ！」
対してひまりは顎を大きく仰け反らせ、こちらの腰の動きの強弱と完全に同調した甲高い喘ぎ声を張り上げる。誠の突入に合わせて宙を漕いでいた両脚も、今はふくらはぎが引き攣ったようになり、親指だけ仰け反らせ、他の指は限界まで丸め込んでいた。
(凄い感じてる！　ならもっと！)
股間から立ち上ってくる壮絶な快感に暴発しないように注意しながら、さらに小刻みに腰を振る。すると——それまで一定の圧力で誠を締めつけていた膣壁が、内側へと煽動するようにペニスをさらに締めつけてきた。
「ッくうぅぅぅぅ」
その強烈な肉悦に耐えるため誠が奥歯を強く噛み締めて腰のペースを落とすと、下のひまりがこちらの背中に両手を回してくる。

「はあぁん、まことぉ♥」

見下ろす恋人の美貌から、妙に力みが抜けていた。

だからといって無表情なわけでも、感情が消えているわけでもない。

こちらを見上げる潤んだ瞳は、とても切なげに細められている。

貴方のことが大好きだよ。貴方のことが大好きだから、私、こんなに気持ちいいんだよ。大好きな貴方に言われたから、あんなにいっぱい恥ずかしいことも言ったんだよ。だから、もっともっと気持ちよくして。そして、もっともっと貴方のことを好きにさせて。

ひまりの表情から読み取れる、そんな様々な想いを一言で表すと――。

貴方のことを愛してる。

全身がセックスの熱で沸騰しているのに、さらに胸の奥が熱くなった。

たとえ言葉でいくら『愛してる』と言われても、今、自分が感じているほどの愛情は得られないことだろう。

こうして身体をひとつにして、肌を重ねて『愛しあっている』からこそ、これほど深く彼女の想いを実感できている。

「ひまりッ！　ひまりいいいいい！」

「はあぁあぁぁン！　まことおぉぉぉ！」

彼女のことが心の底から愛おしくて、腰の動きが爆発的に加速する。

猛スピードで溝の深い膣襞たちと擦れあい、凄まじい質と量の快感が男根から全身に向かって轟きまくる。
それでもさらにひまりの肩を制服の上から両手で掴み、彼女が上にズレたり逃げたりすることを防いで——自身の中で渦巻いている様々な感情を爆発させる。
「んあン！　んあぁあぁぁぁ！　凄いよコレ！　誠に一番気持ちいいところをこんなに激しく突かれて、気持ちよすぎて自分がどうなっちゃうかわかんないよおぉぉぉ！」
そう絶叫するひまりの声は、激しすぎるペニスの突入によって物理的に震えていた。
それほど猛烈なセックスに、誠も頭の天辺から爪先まで愉悦に痺れさせ——。
「俺もイクぞおぉぉ！」
僅かに残った理性で上半身を軽く浮かし、フィニッシュ直前にペニスを抜き出そうとする。が。
「いいよぉ！　このまま私の中でいっぱいイッてえぇぇぇ！」
「ええ⁉　い、いいのか⁉」
「いいよぉ！　大丈夫な日だから！　今日は、絶対に大丈夫な日だからあぁぁ！」
「よし！　わかったあぁぁ！」
そうとわかればあとはもう、心の底から愛する恋人と共に、最高のフィニッシュを迎えるだけだ。

意識の全てをひまり一色に染め抜いて、遮二無二ペニスを突きまくる。
激しくビクつき続けている膣襞たちと猛スピードで交じりあい、全身の細胞が沸騰するようなトドメの肉悦を味わい尽くす。そして――。
「イク！　ひまりの中でッ！　あぁぁッ！　ひまりいぃぃぃ！」
誠はそう絶叫すると同時に、一際深く腰を突き入れて動きを止めた。
肉先が彼女の最弱点である子宮孔にガツンと嵌まり込んだ衝撃で、己の尻が最後の肉悦にブルリと震えたその直後、
――どりゅン！　どぎゅドプッ！　どりゅドギュどぷン！
極限まで剛直したペニスの中を内側からぶち抜くように、灼熱の精液が迸っていく。
「あくふぁぁぁぁ！　まことのでてるうぅぅ！　まことのおちんちんが、私のいちばん奥でばくはつしてるうぅぅぅぅ！」
ひまりからこちらにしがみつくと、膣内射精しているペニスの脈動を自身の女体で再現でもしているかのように、腹筋を中心に全身を激しくビクつかせ始めた。そして、
――ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
盛大に潮を吹き出す。
そうして同時に達したふたりは、互いに絶頂液をぶちまけあいながらも、しっかりと抱きあい続ける。その射精や潮の勢いで、ひとつになったふたりの身体が万が一にも離れ離

れになってしまわないように。
「っあぁぁ……っくふぁぁ……ふはあぁぁぁ……」
先に官能の彼方から、理性が戻ってきたのは誠の方だった。
彼女の肩を掴んでいた手から力が抜けて、そのまま恋人の上に覆い被さるようにして脱力する。
「ふはあぁぁ♥　まことぉ♥」
するといまだに全身をヒクヒクと痙攣させているひまりが、うっとりとこちらを見上げてきた。
誠は吸い寄せられるように、その唇に唇を重ねていく。
射精直後の気怠さの中、己の全てを受け止めてくれた恋人と優しく舌を絡めあう。
そうして凄まじかったセックスの余韻を最後までふたりで味わい尽くすと、誠は身体をベッドの上に横たえた。
「えへへ♥」
するとひまりがほっくりと満ち足りた笑みを浮かべながら、その頬をこちらの胸の上にチョコンと乗せてくる。
やっぱり可愛いな――自然とそう思った。
セックスをしても、ひまりのピュアな魅力は全く色褪せることはない。

反り返った肉棒に、唇と舌で積極的に奉仕し始めた。
（だいたい俺、まだキスだってしたことないのに！　それなのにッ！）
薄皮がパンパンに充血している亀頭に、初恋相手の桃色舌がねっとりと絡みつき、爪先から頭の天辺まで、痺れるような肉悦が走る。
「そ、それッ！　ス、スゴッ！　ちょっッ！　や、や――ッッッッ!?」
ヤバいって、と叫ぼうとした口は、暴発を防ぐために奥歯を強く噛み締めた。
こちらは一週間抜いていなくって、最初の一舐めで果ててしまってもおかしくないコンディションなのに――。
「はあぁん♥　タカくんのすっごく熱くて、ガチガチになってるよぉ♥　これって、気持ちいいから、こうなるんだよね♥」
ご奉仕大好きメイドはお構いなし。
可愛らしく尖らせた唇で、チュッチュッと連続してペニスにキスをしてくる。
特に先端の小穴が弱いと気付いてからは、そこだけを集中的にレロレロと舐め出した。
唾液でぬめった桃色の肉片が小刻みにそこをなぞるたびに、仁王立ちしている膝がガクガクと震えるほどの快感が迸ってくる。
「こ、ここまで！　これ以上はマジでヤバいから！」
鷹志は意志の力を総動員して、このまま果ててしまいたい欲望にあらがい腰を引く。

「あん、もぉ～。なんで途中で止めようとするの？」
「い、いやだって！　このままイッたら……俺のがるー姉ちゃんの……」
顔に直撃してしまう。
下手をすれば口の中に入ってしまうかもしれない。
「いーよ、別に。服が少し汚れるぐらい。洗えばいいし、替えもあるし」
「い、いや、そこを心配してるわけじゃなくって……」
相手はおっとりマイペースお姉さんの静流である。
はっきり言わないとこちらの意志が伝わらないらしい。
「あ、あのな！　るー姉ちゃんは何か勘違いしてるみたいだけど、男がイクとそこからザーメンって奴が出るの！」
「そんなの知ってるよぉ～。それが溜まると男の子がムラムラしちゃうんでしょ？　それを出すために、こうしてご奉仕してるんだから」
「ならわかるだろ！　さっきみたいなの続けてたら、るー姉ちゃんの口の中に俺のが出ちゃうんだぞ！」
「いいよ♥　タカくんのおちんちんから出たものなら、ぜーんぶ飲んじゃう♥」
彼女は両手でこちらの腰を掴み、逃げられないようにして――パクッ♥
「ッッくぅッッッッ!?」

肉先をがっぽりと咥えてきた。
舌や唇の刺激だけでも充分に気持ちよかったのに、今は亀頭が丸ごと口の中だ。
ムッと熱くて密度の濃い肉悦が、鷹志の一番敏感なところを蒸し上げてくる。
（そ、それに……るー姉ちゃんの視線がッッ！）
視覚的なインパクトも強烈だ。
無意識レベルにまで刻み込まれていることが判明したばかりの、好みすぎる静流の美貌にジッと見つめられながら、己の勃起ペニスが咥えられている。
この光景を脳裏に焼きつけておくだけで、当分エッチなオカズには困らないことだろう。
「い、いいの、かよッ……こ、このまだとマジでッ……」
今にも暴発しそうな衝動に耐えるため、声が大きく震えてしまう。
「ん♥」
すると彼女は咥えたペニスを放すどころか、こちらの腰を掴んでいる両手に力を込めて、絶対に鷹志を逃がさないようにする。
そして唇を竿肌に密着させたまま、ゆっくりと顔を前後に揺らし出した。
「ッッッッッ⁉」
股間から立ち上ってきた壮絶な快感に髪が逆立ちそうになり、鷹志はその頭を抱えるようにして身悶える。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!